

2008年 秋学期のまとめ

□ はじめに

今学期も引き続き、今までと同様、Gallaudet 大学において、ソーシャルワーク修士号取得に必要な講義を5つ履修登録した。

- 1) 人間行動と社会環境の視点から見た、ろう者・難聴者を取り巻く問題 (Issues in Human Behavior and the Social Environment: Deaf and Hard of Hearing Populations)
- 2) ろう者・難聴者を対象としたソーシャルワークの実践：ミクロ介入 (Practice with Deaf and Hard of Hearing Populations: Micro Interventions)
- 3) ろう者・難聴者を対象としたソーシャルワークの実践：マクロ介入 (Practice with Deaf and Hard of Hearing Populations: Macro Interventions)
- 4) スクールソーシャルワークの演習 School Social Work Practice
- 5) ろう者・難聴者に関わる調査の演習 Research Practicum I: Deaf and Hard of Hearing Populations

今学期は、現場実習（インターンシップ）はなく、教室におけるクラスのみであった。また、講義の名前を見ても分かるように、すべてろう者・難聴者に関わるテーマであり、学生の多くがろう者・難聴者であることも併せて、どのクラスにおいても学期中を通じて学生同士の議論が活発に行われた。私の場合、大学院に入る前に、ソーシャルワーク分野における経験がまったくなかったのも（日本でいう「社会福祉」すら知識がない）、それがディスカッションやプレゼンにおいても影響し、クラスにおいて教授や学生についていくのに精一杯で、自分だけが取り残されたような気分になったことが多々あった。しかしながら、現在、現場実習においてさまざまな経験を積んでいく中で、「なるほど！」と気付かされることがしばしばある。現場での経験の重要性を身にしみる今日この頃である。

□ 人間行動と社会環境の視点から見た、ろう者・難聴者を取り巻く問題

このクラスでは、以下のようなテーマについての議論がなされた。

- 1) 社会におけるろう者・難聴者の地位の変遷（過去と現在）
- 2) 「deafhood」と「deafness」の紹介とその意味について
- 3) 医学的な見方と文化的な見方の相互作用の考察
- 4) 「Existential theory」と「Hegemony theory」のろう者・難聴者
- 5) 「Erickson's developmental theory」のろう者・難聴者
- 6) 乳児期、幼児期、児童期、青年期にわたる、ろう児・難聴児の社会心理的、認知的、言語的、コミュニケーションの発達について
- 7) 「Attachment theory」とろう児・難聴児
- 8) デフコミュニティ（ろう者の集団）とろう学校における寮の全体的な役割

- 9) 成人ろう者・難聴者が抱える問題（心理分野、教育分野、社会分野）
- 10) ろう者・難聴者の老後について
- 11) ろう者・難聴者の家族の多様性（デフファミリー、聴者の親から生まれたろう者、ろうの両親から生まれた聴者の子供など）
- 12) デフコミュニティの性格、機能と役割
- 13) 中途失聴者の生活（心理的葛藤の段階と失聴理由に応じた援助技術）
- 14) 難聴者のグループにおける共通点と、彼らに対する援助技術（家族、教育、心理、社会）
- 15) ろう者としてのアイデンティティの多様性と人種・性別・年齢・社会的・経済的地位との関係性
- 16) デフコミュニティにおける、人工内耳に関する論争
- 17) ろう者・難聴者の団体の発達、構造、機能、役割（組織に関する理論、エンパワーメント理論の適用）

講義の形態は、ディスカッションが基本であり、学生は、講義の前に、指定の教科書や様々な論文を読み、意見をまとめておくことが求められていた。上に挙げられたテーマから見ても分かるように、アメリカでは、多様なテーマを扱い、また、それらに関する文献も豊富である。日本にもろう者・難聴者に関する文献がもっと増え、一般のフォーラムやシンポジウムだけでなく、大学や専門学校などで、こういった題目・概要の講義が設置されるといいだろう。

□ ろう者・難聴者を対象としたソーシャルワークの実践：マイクロ介入

ろう者・難聴者を対象とした個人援助技術をマスターすることを目的としたクラスである。ろう者・難聴者のクライアントが抱えている心理的ストレスを少しでも和らぐのを手助けするために、ソーシャルワーカーがカウンセリングを行うに当たって最も使われるカウンセリングの技法についての知識を深めた。例えば、「実存療法（existential therapy）」、「クライアントの物語に基づく療法（narrative therapy）」、「認知療法（cognitive therapy）」などである。これは、グループプレゼンテーション形式で進められ、僕は、二人のクラスメイトと共に「認知療法」について発表した。この発表には、単に自分の担当するカウンセリングの技法に関する説明だけでなく、ろう者・難聴者のケースを交えて、どのようにその技法を適用していくかといったところまで説明を求められた。大学時代、「心理学入門」のクラスを受講したことがあるだけで、心理学に関する知識が皆無であった僕にとって、このようなプレゼンを行うことは、無謀に近いとしか言いようがなかったが、共に心理学専攻だったクラスメイトに助けられて、無事にプレゼンを終えることができた。

このほかにも、クラスのディスカッションを通して、いろいろなことを学んだ。ソーシャルワーカーとしての自分自身を客観的に見つめることも、さまざまなバックグラウンドを持ったクライアントと協働する上で不可欠である。自分自身の中にある個人的な価値観とは正反対の価値観を持つクライアントを援助していくにあたっては、こうした客観的な自己評価ないし自己分析が求められる。

また、ろう者・難聴者を効果的に援助していくに当たっては、手話通訳に関する知識も欠かせない。さまざまな場面を想定しながら、ロールプレイを通じて、手話通訳のあり方、ソーシャルワーカーとしての適切な対応の仕方などを学んだ。手話通訳というと、英語とアメリカ手話（ASL）の手話通訳をイメージしがちだが、ここアメリカでは、スペイン語を第一言語とするラテン系アメリカ人も多く、彼らにカウンセリングを行うに当たっては、スペイン語の通訳も手配する必要がある。このように、ラテン系アメリカ人グループのろう者やその家族を対象とした援助技術を身につけておくこともソーシャルワーカーに求められている。ロールプレイではこうした場面の想定も含めて行われたが、全員が平等に情報を得ることの難しさ、複数の通訳を介したミーティングをスムーズに行うための技術を身につけておくことの重要性を学んだ。また、アメリカにおいてもASLの通訳やスペイン語の通訳の不足は依然として問題となっているようである。日本とはまた違った意味でここアメリカにおいても通訳が足りないという問題に直面しているようである。

よく「ろうの世界はとても狭い」と言われるように、ある人が自分のクライアントになる前に、その人のことを何らかのきっかけで知っていたり、あるいは、友人だったりすることも珍しいことではない。そんなとき、倫理的な観点から、ソーシャルワーカーとしてどのように対応すればいいのか、どのように行動をとるべきなのか、クラスにおいて議論が行われた。ろう者・難聴者のクライアントが最も懸念するのは彼らのプライバシーがどのように守られるかである。ソーシャルワーカーとしてクライアントのプライバシーを保護するに当たって、手話通訳サービスやインターネットを使ったリレーサービスなどの利用も含めて、どんな問題があるのか、どのように対処すべきなのかについて話し合った。それに加えて、ソーシャルワーカーとしての自分の立場を守るために気をつけることは何かについても、学生それぞれの経験、試み、意見などが交わされた。

一口に「ろう者・難聴者」と言っても、実際にはいろいろなろう者・難聴者がいて、彼らに対する援助方法も一人ひとりで異なることは言うまでもない。例えば、ろう盲者（アッシュャーシンドローム症候群など）、経済的に苦しい人、幼少時に性的虐待を受け、それが今日の人間関係に影響し、それについて悩んでいる人、アルコールや薬物依存症からなかなか立ち直れないでいる人、ゲイ・レズビアンの人、突然耳が聞こえなくなった人やだんだん聴力が落ちていく人などなどである。彼らの置かれている立場や状況に対する理解を深め、彼らに対するエンパワメントにはどのような方法があるか、それについての議論もなされた。

□ ろう者・難聴者を対象としたソーシャルワークの実践：マクロ介入

ろう者・難聴者を援助するに当たっては、必ずしも、上に述べたような個人レベルによる援助だけではない。例えば、ろう者・難聴者の社会的地位を向上させるために、ろう者・難聴者の団体を「立ち上げる」、「改革する」、「（他の団体と）交渉、あるいは、提携する」こともソーシャルワーカーが担う重要な役割の一つである。その役割を果たすためには、強力なリーダーシップはもとより、こうした団体レベルにおいて活

動していくために必要な知識や技術をマスターする必要がある。このクラスは、そうしたマクロレベルでのソーシャルワークの知識や技術を学ぶためのクラスである。

アメリカにも、日本と同じように、ろう者・難聴者の団体がたくさん存在しているが、それぞれ、何らかの問題を抱えていることが分かった。例えば、団体を運営していくための資金が足りない、クライアントのニーズに合ったサービスを提供することができない、その団体のサービスを提供できる人材がいない、などなどである。

まず、はじめに、「団体」とは何かを理解するために、クラスにおいて配られたアメリカのろう者・難聴者の団体のリストから興味のある団体の一つを選び、それについて調査・分析し、レポートにまとめるという課題があった。僕は、Gallaudet 大学にある学生の会の一つ、Asian Pacific Association (APA)について調べ、レポートにまとめた。当初は、リストにあった National Asian Deaf Congress (<http://www.nadc-usa.org/>)を選んだが、調査を進めていくに当たっては自分の興味のある団体の理事会(役員会)を傍聴することも求められており、事実、そのためにニューヨークまで足を運んだが、一回だけでその団体のすべてを把握することにはとても無理があった。途中で、教授と相談して調査する団体の変更を認めていただいた。APAの会長とメールでやり取りをしながら、その団体の会議を何回か傍聴させていただいた。APAの会長とのインタビューも行った。レポートには、その団体の目的や組織、活動内容、組織に関するモデルや理論の適用などをまとめた。

学期の後半になると、教室におけるクラスはなく、学期最後のクラスの日に行われるグループによるプレゼンテーションに向けて、それぞれのグループが自主的に集まり、会議に参加するという形で、グループによる共同作業が進められた。グループは3つで、それぞれ異なった団体について調査・分析を行い、それぞれの団体が抱えている問題は何か、その問題を解決するためにはどうしたらよいか、そのために取った行動(アクション)とは何か、その結果、どうなったのか、などなどといったことをそれぞれのグループで話し合いを重ねた。グループの中で、それぞれ自分の担当する項目について調べ、それをパワーポイントのスライドにまとめ、最終的にグループみんなでそれぞれ作成したスライドを一つにまとめ、お互いにフィードバックを行い、最後のクラスの日に表示するというものであった。その3つのグループとは、以下の通りである。

- A) A project with MDAD/ODHH to promote the development of mental health services for deaf and hard of hearing people in Maryland
- B) A project with Red Cross to develop their emergency response capacity with deaf and hard of hearing people.
- C) A project to enhance program development at the Buea School for the Deaf, Cameroon

僕は、生活記録にも報告したとおり、このうち、Cグループを選んだ。今は亡きルームメイトがカメルーン出身でカメルーンにおけるろう社会についていろいろと話を聞いていくうちに、発展途上国におけるろう学校を支援するに当たってはどのような方法があるのかについて興味があった。カメルーンに Buea School for the Deaf (BSD) と呼ばれる学校があるが、これは 2003 年に Gallaudet 大学の卒業生によって創立された

ものである。創立者である Aloysius Bibum と Margaret Bibum は、この学校を設立する前に、カメルーンのろう協会の活動に携わっていたが、やがて、ろう協会の更なる発展のためには、幼児期からの教育が重要であるということ強く認識し、この学校を設立することを決めたそうだ。それ以来、BSD への入学を希望するろうの子供たちが増えてきているが、同時に家庭の経済的な理由によって入学が難しいという問題が深刻化している。一人でも多くのカメルーンのろうの子供たちが BSD において質の高い教育を受けられるように、世界（主に欧米が中心である）からスポンサーを探すことを目的として、2007 年にアメリカにおいて Friends of Buea School for the Deaf (FOBSD) が設立された。FOBSD の理事たちは、Gallaudet 大学をはじめ、いろいろなところへ赴き、BSD に関する講演活動を精力的に行っている。こうした FOBSD の活動をお手伝いするために立ち上げられたのが、このプロジェクトなのである。このグループはとても人気があり、クラスメイト 7 人で進められた。FOBSD の目的の通り、少しでも多くのスポンサーを獲得するために、Gallaudet 大学内の様々な学生のグループの代議員で構成される学生の会議に出席し、BSD に関する講演を行ったりした。このプロジェクトを通じて、人間として当たり前には享受されるはずの基本的な権利（例えば、教育を受ける権利など）さえも保障されていない子供たちが同じ地球の上に存在しているということを知ることができた。また、それだけでなく、ソーシャルワークという分野は必ずしもアメリカ国内だけでなく、世界の発展途上国を支援するに当たっても必要な分野の一つであると言うことを実感できた。彼らに対する支援方法は必ずしも実際に現地に行って支援活動を行うだけでなく、上に述べたように、国内においても出来ることがたくさんあるということを知ったプロジェクトであったと思う。卒業後、日本だけでなく、アジア全体のろう者・難聴者への支援に携わる機会があれば、これらの経験を少しでも活かしたいと思っている。

□ スクールソーシャルワークの演習

Gallaudet 大学大学院のソーシャルワーク研究科は、一般のソーシャルワーク (General Social Work) とスクールソーシャルワーク (School Social Work) と二つのコースがあり、このクラスはスクールソーシャルワークの必須科目の一つである。多くのスクールソーシャルワーク専攻の学生は、最後の学期に行う現場実習で、ろう学校、またはその付属機関に配属されることになっているが、そのためにもこうしたスクールソーシャルワーク関連のクラスの履修済みが前提となっている。

ろう学校でのスクールソーシャルワーカーとしての経験が豊富な教授の下で、ろう学校のスクールソーシャルワーカーとして、ろう児・難聴児が抱えている様々な問題をどのようにして解決すればいいのか、また、子供たちの親との円滑なコミュニケーションを図るためにはどうしたらいいのか、などといった、スクールソーシャルワーカーとしての役割や責任を全うするために必要な知識や技術、ノウハウを学んだ。

このクラスでは毎回のようにロールプレイが行われた。学生それぞれが交代で、ソーシャルワーカー、ろう学校の生徒（一人または複数）、生徒の親（一人または二人）の役を交代で演じながらロールプレイを行い、その後に関する議論が行われた。「中学生がソーシャルワーカーに自身の妊娠を打ち明けました。あなたならどうす

る？」「トイレでカップルが性的行為を行っているところをあるスタッフに見つかり、ソーシャルワーカーのところに連れてきた。そんなとき、あなたならどうする？また、そのカップルがレズビアンだったとしたら？」「生徒の体に暴行を受けたような跡があった。その生徒の親が生徒に暴行を振るっている可能性が高いと判断したとして、その親を含めた三者面談ではどのようにアプローチする？」「生まれたばかりの赤ちゃんが耳が聞こえないことが判明し、絶望的な悲痛を味わっている親御さんがあなたのところに来ました。あなたならどのように対応する？」「ある生徒が突然ろう学校を辞めたいと言い出した。人工内耳を装着して通常の学校で学びたいと。そのとき、あなたならどうする？」「ある生徒の成績が最近思わしくない。原因も分からない。ソーシャルワーカーはどのようにその生徒とコミュニケーションをとってサポートする？」などなどである。これらのテーマは、初めから講義のシラバスに載っていたわけでもなく、そのつどそのつど教授が学生にテーマを与え、「もし、あなたがこういう状況に置かれた場合、ソーシャルワーカーとしてどうする？」と言って学生たちにロールプレイをさせるのである。もちろん、途中で行き詰まりを感じたら、他の学生や教授に助言を求めることもできた。このような感じでクラスが進められた。ロールプレイは、実際の場面とは異なるので、初めはその妥当性・有効性に疑問があったが、今、こうして現場実習に取り組んでいる中で、「あの時、ロールプレイをやったな！」と思う場面に時たま遭遇する。そういう意味で、ソーシャルワークの知識と技術を習得するとき、ロールプレイも非常に有効な手段の一つであると思う。

また、アメリカでは、IEDA (Individual with Disabilities Education Act) と呼ばれる法律がある。これは、1990年に、障がいのある子供たちが、能力の有無に関係なく、適切な公的教育を無償で受ける権利を保障することを目的として、作られたものである。その法律により、アメリカのろう学校では、ほとんどの生徒が IEP (Individual Education Plan) と呼ばれる、学校と生徒・保護者の間で交わされる合意書のようなものがある。IEP を作成する前に、生徒に学力テスト、心理テスト、身体検査などを行い、それらの結果に基づいて、どのようなサポート・配慮が必要か、生徒と保護者の要望を受け入れつつ、三者間同士の話し合いを元にこの IEP が作られ、IEP が作成された後は、学校・保護者・生徒全員がこの IEP の内容に従うことになっている。つまり、生徒は学校側に対して個々の状況に合わせたカリキュラムやサービスを要求する権利があり、具体的な要望を IEP の会議において述べる機会が与えられるが、それと同時に、IEP に定められた教育に関する目標を達成するための努力をすることも期待されるのである。このクラスでは、この IEP に関して、スクールソーシャルワーカーとして子供や保護者の権利を擁護するため、どのように関わっていくのか、生徒一人ひとりの問題に合わせてどのように教育に関する目標や目的を IEP に盛り込むべきか、などなどを学んだ。

□ ろう者・難聴者に関わる調査の演習

このクラスは、学生が一年次に学んだ調査の方法やデータ分析の知識を活かしながら、ろう者・難聴者に関するテーマを決め、一学期かけて調査を進め、学期末までに調査の結果をまとめ、発表するというものである。僕は、以前から関心があった「ADA 法 (障害を持つアメリカ人法)」についてクラスメイトと二人で調査した。まず初めに、

ADA法に関する最新の動向を把握するために、司法省のホームページに目を通したり、司法省や全米ろう者協会（National Association of the Deaf）の弁護士に会いに行き、今日のADA法を取り巻く状況や諸課題の説明を受けたりした。調査していく中で最も苦労したのは、ADA法に関する資料や論文を集め、それらを読むことである。ADA法は、聴覚障がい者（ろう者・難聴者）を含む障がい者への差別を禁止する包括的な法律であるため、自分の調査したいテーマに即した論文を選び分ける必要がある。また、聴覚障がい者（ろう者・難聴者）への差別と言っても、いろいろなものがあり、自分の調査のテーマに合った論文でなければそれが自分たちの結論を裏付けることにはならない。そういう意味で、ADA法に関する論文を探しては読みの繰り返しが続き、この部分が最も調査の中で時間を費やしたと思う。それと同時に、自分たちの調査のテーマおよび目的も決定した。Gallaudet 大学ソーシャルワーク学部の大学院生、大学4年生、教授陣を対象に、どれくらいADA法に関する専門知識を備わっているかについて質問調査を行うというものである。調査における質問は、大きく3つに分かれ、ADA法そのものの知識を問う問題（5問）、ADA法の適用力を試す問題（5問）、ADA法の運用力を試す問題（5問）、合計15問の質問を行った。

当初は、調査企画書を完成させ、Gallaudet 大学内にある審査委員会より承認をもらい、データを集める予定であったが、上に述べたように、ADA法の論文の分析に時間がかかってしまい、学期の最終日までに調査を終了させることが困難になってきたため、途中で教授と相談した上、この審査委員会からの返事を待たずに質問調査を進めることに決めた。調査によって得られたデータの分析を行い、その結論と今後の課題や展望についてパワーポイントにまとめた。データ分析には、去年勉強したSPSSという調査のプログラムを使用しながら、その調査の結果の分析を行った。本来なら、学期末最後のクラスにおいてこのテーマについて発表する予定だったが、教授の都合によりキャンセルとなり、パワーポイントを教授に提出して私たちの調査は終了した。

この調査は同期のクラスメイトと二人で進めて来たが、一学期かけて進めてきたこの調査を通じてADA法についていろいろな角度から見つめることができた。ロースクール進学という当初の留学の目的であったADA法の調査・研究をここ Gallaudet 大学大学院ソーシャルワーク研究科においても実践することができ、法律とソーシャルワークは相互に関連していると実感したクラスであった。